則藤ラボの研究紹介

フードシステムから福島と日本、世界の明日を考える

グローバルに動態を捉え、ローカルにデザインしよう！

則藤孝志（農業経営コース「フードシステム論」担当）

2005年頃、当時大学生だった私はすてきな研究アイデアが着想しました

「梅干し産業」を徹底的に調べよう！ウメの生産から梅干しの消費までをトータルに分析。
➡現代日本の食・農問題と地域（産地）の戦略の両面が見えてくるんじゃないか？

『梅干しのフードシステムの空間構造と産地動態に関する研究（博士論文、2016年）』

ウメには必ず「加工」が伴う
➡農商工連携のモデルケース

加工食品輸入（開発輸入）
の先頭バッター（1961年～）

安売りの対象に。
スーパーのバイイング・パワー

則藤ラボの基礎研究：現代日本のフードシステムの構造分析

ローカル（地域・産地） × **インターナショナル（国際）** × **ナショナル（国内）**

6次産業化や地産地消がブームになっているね。とても大切だ。でもローカルに閉じた視点ではいけないよ！一粒の梅干しの「フードシステム」（生産⇔加工⇔流通⇔消費の仕組み）は、地域、日本、そして世界に広がっていた。つながっている。その「構造」はダイナミックに変化している。さあ、未来に引き継げるフードシステムの形を探しにいきましょう。

テーマ①　持続的なフードシステムとそれを支える価格形成システム

もやし1袋19円。
財布にやさしい家計の見方。
そのフードシステムは持続的なのか？
➡「食の価格形成」の仕組みを捉え、主体間のパワーバランスを分析し、「適正価格」を問う研究を進めます。

テーマ②　東アジアフードシステムの構造分析とアグリビジネス

クイズ：
●●に入る国/地域を答えよ。

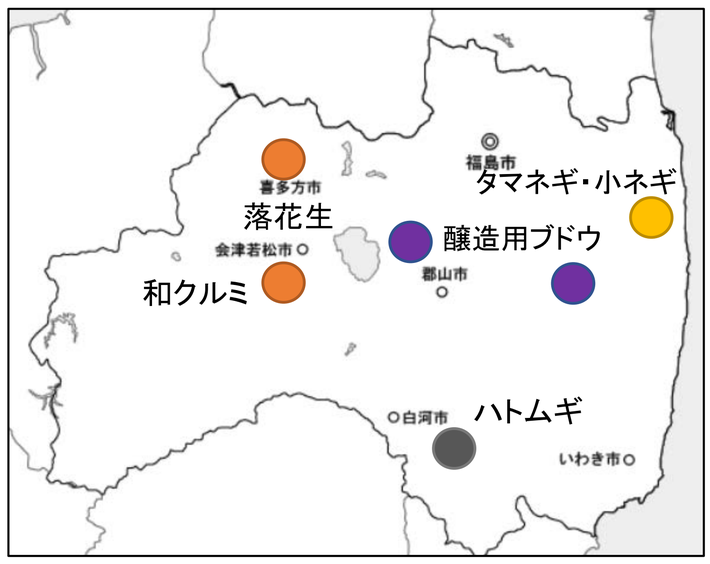
写真の共通点：かつて●●で日本向け輸出が開始され、1980年代までは大きなシェアをもっていたが、現在はほぼ全量、■■や△△に輸出拠点が移転している。

則藤ラボの応用研究（福島ミッション）：フードシステムの地域デザインと産地形成

フードシステムを構成する農業と食品産業は、福島県を支える重要な産業群です。そこに観光業や医療・福祉部門、教育部門も加わって、商売と交流でにぎわう地域経済（地域フードシステム）をいかにして築いていくか、それをどうマネジメント（地域経営）していくか、これが私の中心的な研究テーマです。

ここに注目！ 浜・中・会津で始まっている、新たな産地形成の芽生え

上の写真は、川内村にて地域ぐるみで展開するワイン産地の形成に向けた取り組み。
これを一過性のブームやイベントに終わらせない、地域産業のビジョンを描きたい。



図：農商工連携による産地づくりの一例

これらの研究は下記の通り日本学術振興会・科研費のサポートを得て行われています。

- ◆「食料産業クラスターの形成と構造変化に関するフードシステム的研究」（学振DC1、2009～11年）
- ◆「日本農村における地域づくり型農商工連携のモデル化とその実証」（学振PD、2013年）
- ◆「食と農の地域内産業連関の再構築に関するフードシステム的研究」（研究活動スタート支援、2014～15年）
- ◆「地域産業クラスターとしての産地形成と農業・農村復興に関する研究」（若手研究、2018～20年）